



今月の御聖訓



に強言をかきてあけ置彼也すてに三十五十
よ及ぬ余命い々々えからん、自らに願
野よすてん身と同ハ一乗法花乃の心にかけ
て雪山童子薬王并乃跡とわい仙、後有得
乃名を後代よ留て法花涅槃經よ説入られ
まいらんと願とこころ也

《信伝筆》(北山本門寺藏)

【(方)々に強言をかきてあげ置候ナリ也。】すでにとし五十
に及ぬ。余命いくばくならず。いたづらに曠
野にすてん身を、同ジハ一乘法華のかたになげ
て、雪山童子薬王菩薩の跡をおひ、仙予・有得
の名を後代に留めて、法華・涅槃經に説入られ
まいらせんと願フところナリ也。
南無妙法蓮華經

【法華捨身念願抄 全集九九九頁】

目次

今月の御聖訓	
卷頭言	菅野憲道 1
お説き話 「広宣流布について」	菅野憲道 2
御書と日興上人〔188〕	松田銘道 8
「興風談所の研究成果(十八)」	菅原関道 10
【山行記】「近場の山行記」	森 秀之 14
お説き話	18
法華講入講式住職挨拶	20
五月の行事 皁月詠草 恵日俳壇 訃報	

お講話(要旨)

拝読御書 「三大秘法抄」 (全集一〇二二頁)

広宣流布について

菅野憲道

《王法と仏法は不二》

本日は、「三大秘法抄」を通して、広宣流布についてお話しします。

「三大秘法抄」は真偽論のある御書ですが、戒壇について、「戒壇とは、王法仏法に冥じ、仏法王法に合して、王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて、有徳王・覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時、勅宣並びに御教書を申し下して、靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者か。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是れなり。三国並びに一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王・帝釈等も来下して踏み給ふべき戒壇なり」(全集一〇二二頁)と述べられています。御書の中で「本門の戒壇」についてその戒壇の内容、形式等についてある程度詳しく述べられたのは、この「三大秘法抄」しかありません。

明治以降、国家主義が盛んになり、国柱会の主宰者田中智学も機運に乗って本門戒壇建立の意義を解釈して国立戒壇論を唱

えたことから、宗門や創価学会も影響されて国立戒壇を旗印に、折伏活動を展開して急拡大したものです。しかし昭和四十五年に藤原弘達の『創価学会を斬る』という本の出版妨害をしたことで、それまでの言論抑圧や暴力的体質が各界から指弾され、信教の自由、言論の自由という憲法の基本的理念に抵触するとの疑念がもたれるに至ったのです。

そこで宗門と学会は国立戒壇論はやめて民衆立戒壇とし、その戒壇は正本堂に当たると解釈変更し、同時に強引な折伏闘争も路線変更して友好活動とし、政権をめざすためには他宗教とも仲良く付き合い、時間をかけて勢力拡大していこうという考え方に転換したのです。

しかしこの解釈変更には妙信講が異を唱え、国立戒壇は日蓮大聖人の御遺命であると猛反発をして紛争となり、最終的には宗門から追放されるのですが、今でも顕正会(妙信講)は国立戒壇という名目に固執して、かつての学会と同じような教条的な運動を続けています。

しかし、基本的に仏法とは一念三千という、一念心の法界の

話であることから外れてしまつて、国家権力を用いて国立戒壇を建てようというのですから、戒壇を内面的な信仰次元の問題、いわゆる心の問題として捉えることを離れて世俗権力の次元にならざるを得ません。

いうまでもなく国家権力と宗教のもつ絶対的權威が直接的に一体化してしまつたら、そこにいろんな弊害が起こってきます。少なくとも近代社会が、信教の自由とか政教分離を制度化してきたことは、内面的な心の中の問題と、現実の社会におけるルールは別の次元の話であり、それが同じ次元で論じられることはないのです。世俗の次元の話と、宗教、信仰の世界の話とはまったく別次元のことと立て分けて考えなければいけないのです。

また、戒壇を建立するという話は、一方には宝塔建立と同じく、何時、何処でも法華經を受持する当処が戒壇（道場）だという経説もありますから、御本尊安置のところは皆戒壇であつて、仏壇を御戒壇と称した例も見られるものです。その延長として、今、ここだけの一箇の流布に止まらず、未来広布の理想として一閻浮提同帰寂光の戒壇建立を願つて信行に精進することに本因修行の要諦があるのです。

それが、国会で多数派を占めて議決して法律を作つて、国立戒壇の施設を造るという話になつてしまうと、他宗教の人たちの税金も投入されるし、政治権力を用いて反対する人を抑圧することにものつながらでしよう。

現宗門や創価学会、顕正会等の教団体制を見る時、独裁制、上意下達、閉鎖的、同族集団となつており、もしもこのような

教団体制を是とするような信仰が広まつて、〇〇王国などという社会が実現するならば、安国どころか暗黒社会に逆戻りするのではないでしようか。

強制や洗脳によるものでなく、人々の自由意志や主体性に基づいた信仰でなければ本当の信心とはいえず、また政治権力から一定の距離を持つという本来の仏教の在り方から大きく外れてしまふのです。

仏教が日本に渡つてきてから日本の国では、鎮護国家という目的で仏教を取り入れ、飛鳥時代から奈良、平安時代を通じて、日本人の精神性や文化的な土壌を豊かにしてきました。どの分野でもほとんどが法華經の教えの影響をうけてきたのですが、政治と宗教の関係が未分の時代における政治体制は未発達で大雑把なものですから、その形態を手本とすることはできないし、また勅宣・御教書など当時の公文書を現代に置き換えればなどという解釈の仕方は多分に違和感を覚えるのではないでしようか。

当然、政権のあり方も昔のような封建制とか王朝制の時代と、今の民主主義の近代国家とはまったく世の中のものありやうが違います。たとえば鎌倉時代や戦国時代は、情報も交通も発達していませんし、いろんな法律もありませんから、幕府の統制が行き届いて居らず、統治の網からこぼれているような人がたくさんいたのです。明治になつて戸籍制度ができるのですべての人を戸籍に載せて国で掌握し、投票権と税金・教育などの権利と義務を負わされるようになったのです。

そういう点からいえば、鎌倉時代はまったく社会とは関係な

しに家族だけで生活しているような人たちもおり、幕府とか領主などとは没交渉の人々も多かった時代だったので、朝廷や幕府が如何なる宗教政策を採ろうと、「我関せず」でいられたのです。しかしほぼ一〇〇パーセント国民を掌握して、様々な法律や制度のもとに生存を保障している近代国家において、国家権力と宗教団体が一体となって特定の宗教を国教化しようということはとんでもなく矛盾した発想なのです。

ただし、王法という世俗の世界と仏法という世俗から離れた内面の世界、心の世界とは、別々なように見えていても本当は冥合しています。色心不二とか依正不二とかいいますが同じ意味です。例えば、我われが心の中で何を思っても自由ですが、心の中で思うことはそのままその人の行動や健康にも影響してくるし、家庭や社会等、いろいろな事に影響してくるのです。

自分の心の中で思っていることと、外側の世界は一往は別々で、何を考えていようと端からはわかりません。しかし、別々のように見えていても、実は因果関係で繋がっていることを、而二不二（二にして不二）というのです。而二不二は、天台大師の「法華玄義」の、迹門の十妙・本門の十妙、十不二門という教義の中に出てきて、別々のように見えていて一体であると言われているのです。

境智冥合というように、私達が御本尊に向かって南無妙法蓮華經と唱える時、妙法蓮華經の光明に照らされて私達の信智と御本尊の妙境が不二一体化するという成道の原理なのですが、同じように、王法と仏法で王仏冥合となります。一個の成道はそれが広くは社会全体、国土全体にまでつながっていて、国土

の成仏、法界同時の成仏という仏法の理想が実現することをいって、諸法実相とはあらゆる物事が因果のつながりのなかにあり、一度このことに気づけば、妙法蓮華經の法界即我も、当体蓮華を証得することも、広宣流布の大願も、一念信中にあることを、大聖人は教えられているのです。

《池田大作の野望》

そのことで有名なのが有徳王・覚徳比丘の説話です。昔インドにおいて覚徳比丘という僧侶が仏法を弘めて迫害を受け、命まで奪われそうになった時に、有徳王が駆けつけて覚徳比丘を守って奮戦し、深傷を負って亡くなってしまったのです。

その有徳王とは釈尊の前生の姿であり、覚徳比丘は弟子の迦葉であると明かされ、仏法僧を守護する理想を表したのです。

これを戦後、池田大作が有徳王とは創価学会、池田大作であり、覚徳比丘は日達上人だと言い出して、自己宣揚の話に揚げたのです。

つい先日『大白蓮華』（五十九号・昭和二十八年頃）の「堀日亨猊下を囲んでお聞きする」という記事を読みました。聞く人は辻武寿、池田大作、龍年光、草創期の青年部幹部のメンバーです。司会は教学部長の小平芳平。その中で、堀日亨上人からいろいろなこととお聞きした記録で、それを自分たちに都合良く解釈しようとするのですが、その中に「（前略）国立戒壇建立の時は」というタイトルでのやりとりで、

「池田 『三大秘法抄』の中の「懺悔滅罪の戒法のみならず大梵天王・帝釈天王も来下して踏み給うべき戒壇なり」の中

の、大梵天王・帝釈天王、印度とか支那とか朝鮮の総帥とか内閣総理大臣とかいわれる意味合いというのは考えられないですか。

猊下

それは考えられない。」と。これは、池田大作は三大秘法が実現して国立戒壇が出来る時に「三大秘法抄」に、「梵天王・帝釈等も来下して踏み給ふべき戒壇なり」と書いてあるのを文字通り自分なりに解釈して質問したのです。要する

に、池田大作は「大梵天王・帝釈天王が来下して踏み給ふべき戒壇」は、戒壇が出来た時には諸外国の権力を持った大統領や首脳や、首相クラスの人がお参りに来るという意味ではないか、と聞いたのです。それで、堀上人は、

「それは考えられない。大梵・帝釈というのは日本仏教の王朝時代からというものね、だいぶ親しくなつて外国の神様でなくなつてゐる」

といつています。堀日亨上人は、梵天・帝釈といつても決してインドの神様ではなく、すでに日本化してしまつてゐる、日本の国の天照太神や正八幡と同様、梵天・帝釈も日本の神様として捉えられているから、決して余所の国の首相とか権力者が来



第59世 日亨上人

てどうかうとかということではないといつてゐるのです。ところが、池田大作は「はあ」と返事して、それに対してしつこく食い下がつていますが、後の方では、

「題目の流布とか、本尊の流布とか實際考えられますし、話してもきていますが、時代によって戒壇の建立の姿が変わるであろうと先ほど言われましたけれども、戒壇の流布ということとは考えられないでしょうか。」

と聞き、猊下は、

「戒壇の流布は考えられんね」と、池田大作の考へていることを否定されているのです。

しかし、池田大作はずっとそれを思い続けており、昭和五十六・七年くらいに大石寺で世界大文化祭をすると、客殿の前を全部壊して大きな広場を作つて、そこで大文化祭をやるうとしたのですが、それが発端になつて

結局宗門と学会が対立状態になつていくのです。途中で大石寺を本門寺と名称を変えて、いよいよ広宣流布が近づいてきて実現する時が来たということ、目先を変えて、大石寺で世界文化祭を開くことで、一方では広宣流布が達成したから有名な人がいっぱい集まつてくるんだ、と盛んに吹聴したのです。

阿部日顕さんもそれにすっかり乗せられて期待したらしいのですが、その狙いは客殿の前にある、広宣流布の暁に朝廷から

ですが、その狙いは客殿の前にある、広宣流布の暁に朝廷から来る勅使を通す時に開ける門があるのですが、その不開門を開けるのは自分だと、池田大作が公言してしまうのです。勅使の門を開けるということは、自分が勅使である、権力者だということですから。決して朝廷の天皇陛下の名代として誰かが来るという意味ではないと、わざわざ聖教新聞に発表しているのです。

池田大作の考えとしては、日本国中とか世界中に向けて創価学会を広めていって、そのことによって政治権力を自分たちが牛耳って、その時には諸外国の首脳クラスの人たちもみんな大石寺に集まって、そして自分たちの影響の元に次は世界制覇を目指すということとまで視野に入れていたのですから、世界文化祭をした時、少なくとも副首相クラスの人たちを大勢呼んで、自分が不開門を開けて自分が広宣流布を達成したといたかったのが、梵天・帝釈にこだわった一つの背景にあるのです。

それらのことは、もっと具体的に宗務院の記録である「藤本メモ」に出ていて、その昭和四十九年のメモのところに、

内事部談話室でお目通りで話したことについて話があったが、重大なこと。会長の質問に猥下のお答えとして、
一、三千万所帯（三千万人）になったら広宣流布であること。



現在の不開門

- 二、その時は本門寺と称する。
- 三、その時は正本堂に謗法の者を入れても良い。
- 四、不開門は関係ない、年に二回開いている。
- 五、天母山も関係ない、とのお言葉だったとの由。

三千万で広宣流布ということも重大だが、それ以上に、その時は正本堂に謗法の者も入れて良いということは大変なことだ、重大な問題だ。明日お目通りしてこの件で御指南を受けることにしよう」と、記録されているのです。

池田大作が猥下にお目通りした際に出た話ですが、三千万という数字は、舎衛の三億の理ですから、当時の日本の人口一億人の三分の一が入信したら広宣流布は達成という、学会特有の考え方、日本の総人口の三分の一の三千万人、実際には八百万所帯になったら広宣流布だということで、大石寺を本門寺改称するとか、開かずの門を池田大作が開けることを、日達上人が認めたという話に、ここではなっているのです。

また、数年後には、学会の内部資料で、池田大作の発言や行動記録が出てきて、『仏教大辞典』掲載の「有徳王」の項目について日達上人から訂正依頼があったのを拒否して、「有徳王が創価学会にあたることは当然だ。本山は学会が大きくなり妬みを持っている。それで日達猥下が抑えようとし

ているのだ。以前からそんなことがいっぱいあった。」
と。これなど池田大作がいかにも徳王に執着していたかがわかります。有徳王とは池田大作で、仏教の歴史の中で特別な使命を帯びて表れた偉大な指導者であるという神話作りのための根拠にするために固執してきたのです。

ですから、大聖人の時代は信徒もせいぜい何百人だが、自分は何千万人折伏したとか、日蓮大聖人は鎌倉時代に亡くなっていない、今は自分だといういい方をしたり、また、池田大作がカリスマ性、神秘的な力で広宣流布してきたということで、例えば、沖繩に池田先生を恋い慕っていた一人の少女がいて、家が貧しく欲しかった赤い靴も買えなかった。それを沖繩を訪れた池田大作が、あったこともなかったその少女に、「あの子に赤い靴を持って行ってあげなさい」と指示され、先生はすべてのことを見通しだったと、本部の指導として伝わったことがありました。千葉の蓮生寺の落慶式の際、清澄寺に登って行って、その千年杉のところで「懐かしいなあ」と言ったのを、側近が池田先生は七百年前の日蓮大聖人の生まれ変わりだという話にして広めたり、池田大作を神格化するために側近の中で事前に準備して伝説が作られていったのです。

池田大作のカリスマ化は、創価学会を一手に自分で支配するためであり、会の結束力を高めて日本国を支配するための布石でもあり、そこで考えられることは、創価学会の広宣流布とか戒壇の話であるとか有徳王・覚徳比丘の話でも、すべてが仏法をその通り自分たちが受け入れて信じるというのではなしに、仏法を利用して自分たちの野心や権力欲を達成しようというこ

とが目的で、要するに本末転倒しているのです。

普通、信仰するということは自分の心を磨く、あるいは一生成仏を願っていく。乃至は、すべての人々が仏法に浴して成仏出来ますようにと願っていくところにあるのですが、学会の場合、儲かる、御利益がある、あるいは組織を利用して出世したいとか、野心を達成する我欲、エゴを実現するための仏教利用になってしまっているのです。

戒壇についても、本来我われが信仰しているところの道場、戒壇は道場の意味でもありますから、信心修行の根本道場としていくべきはずが、自己宣揚のための一つの手段、巨大な建築物を建てた偉大な指導者として組織に君臨し教団を私物化していく手立てとしたことが、はっきりとわかってくるのです。

ともかく、我われが信仰を続けていく上でこの三大秘法というものは宗旨の三箇とあって、信仰の中核を成すものですが、名目は同じでも中身は学会などとまったく理解が違う、言葉は一緒でもその内容がまったく違っていることは明確にしていかなければいけない作業ではないかと思えます。

その意味で、学会で使っている御本尊とか三大秘法、広宣流布ということと、私たちが学んできた広宣流布とか御本尊という意味とは大分違う、このことについて、ある程度は説明できるよう、自覚していかないと、私たちが似て非なる学会教学のままの創価教的なかなか信仰になってしまうように思うのです。ややこしくて面倒な話ですが、信仰の筋目を正す意味においても、関心をもって学んでいきたいと思えます。

南無妙法蓮華經

(了)

〔御書と日興上人(一八八)〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」(一二二)

松田 銘道

前回は『システム辞書』の「本尊」の項目の、「⑦建治から弘安の境目頃を契

機として、宗祖の本尊意識が釈尊本尊より曼茶羅本尊へと変化したと見ることも可能」との見解について、山上弘道氏の二つの関連論文の、①「日蓮大聖人の思想(六)」（『興風』十六号）から、主に「法義的に完成された曼茶羅本尊」の考察についてみてきました、

今回は、②「日蓮大聖人曼茶羅本尊の相貌変化と法義的意義について」（『興風』十七号）から、宗祖が弘安期に「法義的新展開」を示された、との考察についてみていきます。

②では、「第一章 曼茶羅本尊相貌の変化について」、「第二章 曼茶羅本尊相貌の変化とその意義」の章立てに、そ

れぞれ詳細な項目を設け、「法義的新展開」について考察しています。

すなわち、第一章では、「主題」「書名・花押」等、曼茶羅の相貌に関する項目を設け、分析研究しています。第二章では、「『観心本尊抄』以前の形態と意義」、「弘安元年花押変化以前の曼茶羅本尊の特徴」、「弘安元年花押変化以降の曼茶羅本尊の特徴」との項目を設け、法義的意義について考察しています。

以上の分析研究と法義的意義の考察を踏まえて、「結語」では、
 (1)「弘安元年を境とし、大聖人の曼茶羅本尊に対する法義的意義は大きく変化している」。

(2)「弘安元年九月の『本尊問答抄』において、釈尊を本尊とせず法華経の題目

をもって本尊とすると宣言されてからは、身延前期とはうって変わり、曼茶羅本尊はまさに本尊の主体となる」。

(3)「弘安期に入り日蓮門下の主体的本尊として精力的に図顕授与される」。

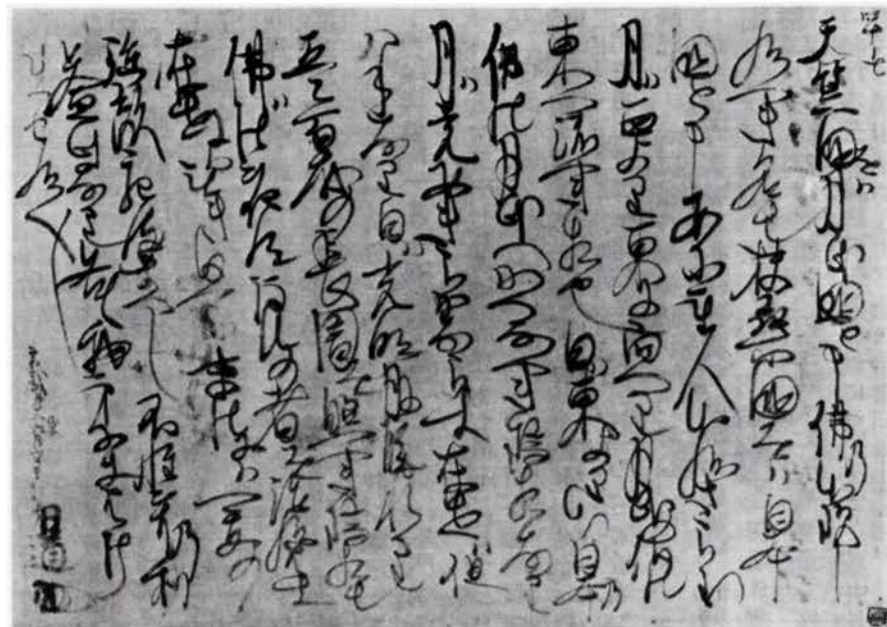
以上のような法義的意義が見いだされことを提示していますが、(1)の「弘安元年(一二七九)」以前の本尊観については、

- ・『報恩抄』に『求メテ云ク、其形貌如何。答テ云ク、一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。(―中略―)一同に他事をすて南無妙法蓮華経と唱フべし』とあるように、本門の本尊の主体は本門の教主釈尊」。
- ・「本門の題目は本門の本尊とは一応別立されている」。

- ・「この時期においては、本門の教主釈尊を中心とした本門三大秘法が提示されている」。

と、建治二年(一二七六)七月二十一日の『報恩抄』では、「本門の本尊の主体は本門の教主釈尊」と規定されている、との見解を示しています。

本尊の主体が、(1)以前の「本門の教主



弘安3年(1280)12月の『諫曉八幡抄』(第16紙～47紙、大石寺所蔵) 47紙(末紙)には、在世的積尊と滅後末法の聖人(宗祖)との対比勝劣が、月と日の光明の勝劣から示され、末法万年の長き闇を照らすのは宗祖ご自身、と末法の教主としての自覚が表明されている。

積尊」から、(2)以降の「曼茶羅本尊」へと変化した両本尊の関係については、山中喜八氏の「一尊四士と大曼茶羅―その三大秘法との関係」(『日本仏教』第十九号)との論攷を取り上げて考察しています。山中氏は論攷で、

・「鈴木一成氏・執行海秀氏の、本尊の形式は一尊四士を正式とし、曼茶羅本尊は正式の本尊にあらずとの見解を否定」。

・「三大秘法を開出別立した場合本門の本尊は一尊四士であるが、曼茶羅本尊は一旦開出した三秘を再び一図に統合されたもの、すなわち三秘が総在している」。

以上のような曼茶羅本尊の意義を示していることに關して、山上氏は、次のような疑義を提示しています。

・「山中氏の所見に一応賛意を表したいと思うが、そこには弘安元年を基点とする大聖人の法義的变化が考慮されていない嫌いがあるように思う」。

・「本門の本尊・戒壇・題目という『三

ツノ法門』は、確かに佐渡期から身延前期にかけては、法義の根幹乃至中心であったことは疑いない」。

・「しかし、身延後期『本尊問答抄』において『法華經の題目をもって本尊とする』と宣言して以降においては、このような概念は一旦ご破算にして考える必要があるのではなからうか」。

・「弘安期の曼茶羅本尊を虚心に拝せば、中央の題目とその下に大書される『日蓮花押』が、曼茶羅本尊の主体であることは明らか」。

以上のような疑義を示した上で、弘安期の曼茶羅本尊の相貌の特徴について、「『本尊問答抄』における積尊を相対化した上での題目を本尊とするの宣言、さらに『諫曉八幡抄』における積尊との対比による大聖人の末法の教主としての自覚という、弘安期の法義的新展開が色濃く投影している」。

と、『本尊問答抄』の題目を本尊と規定する教示、『諫曉八幡抄』の末法の教主としての自覚の表明という、「法義的新展開」を示されたことと関連している、との見解を示しています。(続く)

興風談所の研究成果(十八)

興風談所 菅原関道

『興風』二十七号

『興風』二十七号は平成二十七年十二月十三日刊で、本間俊文「日興自筆文書の再確認」、佐藤博信「駿河北山本門寺の近世的展開とその特徴―日興墳墓と檀那井出氏に注目して―」、古川元也「天文法華の乱の再検討」、石附敏幸「日蓮と中世寺院社会―『実相寺衆徒愁状』の考察を中心に―」、山上弘道「身延曾存御書『十住毘婆娑論尋出御書』『武蔵公御房御消息』について」、山上弘道「長倉論文『初期日蓮教団をめぐる富士山信仰の諸問題』への批判」、大黒喜道「宗祖の教学大系における三大秘法の位置づけについて」、坂井法暉「日興の生涯と思想(二)―生地と俗姓に関する覚え書き―」、池田令道「本圀寺蔵日興本『善無畏抄』の考察」、岡村洋「日興本『善無畏抄』紙背文書・読み取り現し作業レポート」、菅原関道「日蓮の戒壇論の論理構造とその継承」、《史料紹介》渡邊信朝「『不受不施諸師書状等』一卷について」という内容で、巻末に活動報告、聖教調査余録を付す。

昨年六月の定例勉強会には本間俊文氏(立正大学非常勤講師)をお招きして講義をいただいた。「日興自筆文書の再確認」はそれを論文に改めたものである。氏は先行研究の成果を踏まえ、日興の①曼荼羅本尊②著作・記録・書状類③日蓮遺文の写本を概観し、宗祖滅後にどのように思想を継承して教線を伸ばしたかを論ずる。まず①について、現在確認できる日興の曼荼羅三〇八幅の内、一七四幅に授与書(授与された者の名や居住地・血縁関係・授与の目的等を書き添えたもの)がある。摩滅等で判読できないものを除き、授与者は一一五名を数える。その内訳は陸奥三三人、駿河二五人、甲斐二〇人、佐渡一五人、不明一二人等で、陸奥では新田氏、駿河では南条氏・石河氏、甲斐では下山氏・秋山氏への授与が多い。所在地は十一か国に及び、宗祖十七回忌の永仁六年に記した『弟子分帳』のそれが五か国であるから、教線が広域に伸長したことがわかる。次に②について、自筆が現存する文書は一一五点、写本で伝わる文書は三二点あるが、系年の研究が課題である。次に③について、『日興上人全集』では日興写本を六二点としていたが、その後の精査や発見により三二点に減少した。しかし鎌倉期の門下の中で最多の写本数であることに変わりはない。日興は『立正安国論』『観心本尊抄』『撰時抄』『始聞仏乘義』『本尊問答抄』等の著作を書写して、『富士一跡門徒存知事』によれば『開目抄』『報恩抄』も書写した。一方で『上野殿御返事』『南条兵衛七郎殿御書』『波木井三郎殿御返事』『伯耆殿御書』等も書写し、書状からも教義を学び取ろうとした。また宗祖が門下育成の教材に『一代五時鷄図』を用いたのに倣い、日興も同書を書写し

て教材としたが、ただ単に書写したのではなく、内容をより充実させるため、自ら加筆修正を行っている点に特徴がある。こうした積極的な遺文書写からは、重須談所にて教学を研鑽し、人材育成に努めねばならぬという強い使命感が窺える。

佐藤氏(千葉大学教授)は北山本門寺における日興の墳墓造立の背景とその後の展開を、大石寺の動向と併せて検討する。現存の日興墳墓は近世初頭の宝篋印塔形式で、「願主井出半左衛門尉正勝」の銘文がある。井出氏は代々にわたり北山本門寺の檀那として日号を授与されるほどの強信であり、正勝の大伯父正次は江戸幕府の三島・駿河代官を勤めつつ、家康出頭人として活躍し、父正信も両代官であった。正勝も幕臣として活躍し、將軍家光の安堵状獲得に尽力した。日興の墳墓はおそらく寛永二十年(一六四三)前後から慶安四年(一六五二)五月までの間に、本門寺住持日優と井出正勝と日然が主体となって造立したのである。歴代の住持・学頭の石塔も近世初頭以降のもので、初代学頭日澄の石塔に「願主学頭日然贈上人」の銘文がある。こうした日興・日澄等の石塔造立の目的は、本門寺の由緒と伝統が日興の重須談所開設に基くことを内外に顕示するためであり、幕府が寺領安堵の条件として寺院側に、開山・開基・歴代・創建年代・縁起・堂舎・敷地などの由緒と伝統を目で見える形で明確化するよう要求したからであった。しかし内部では住持日優と学頭日然の権力闘争があったようで、日然による堂舎放火とそれにともなう日優の失脚は象徴的な事件である。一方、本門寺に触発された大石寺では、本門寺にない宗祖の石塔を含む三師塔や歴代住持の石塔造立、御影堂の再興等によって対抗するが、

こちらにも内部に要法寺出身の住持による造仏等の問題を抱えていた。以上のご高説に一つだけ感想を加えれば、現存の日興・日澄・日順の石塔がこうした産物であったとしても、それに手を合わせて往時を偲ぶ私たちの想いは必ず通じるだろう。

古川氏(神奈川県立歴史博物館学芸員)の「天文法華の乱の再検討」は平成二十四年六月の定例勉強会で講義された要旨を編集部がまとめたものである。氏は初めに「中世の日蓮教団が生み出してきた文物を目の当たりにすると、東国を中心とする日蓮教団の残したものと、京都を中心とする西国日蓮教団の残したものには、明らかに質的な差異がある。(中略)本報告では、その差異が内在したゆえに京都の日蓮教団にどのような志向性もたらされたかを考えたい。その上で、京都の都市的発達を考える際に重要となる天文法華の乱(天文法難)と檀徒とのかわり、それがこんにちの都市史研究とどのように関わりをもつに至ったかを考えたい」と述べ、天文法難に関する資料を種々検討して、「こうしてみますと、天文法難とは、それほど規模の大きな事件だったのだろうか。もしかすると局所的に、山門から攻撃されたものが、誇張されているのではないか、という気もしてくるのです」「どうも一概に日蓮宗が天文法難の後に、力が衰えたということは考えられないのです。ではなぜ「衰えた、衰えた」といわれるのかというと、やはり天文法難を過大評価しすぎなのではないか、と思うのです。そして過大評価する理由としては、打たれば打たれるほど、信仰を確かなものにしていくという考えが東国の日蓮教団にあって、そういう意識は京都の日蓮教団にはあまりなかったけれども、京都に布教

をした人が日蓮の教説をもとに、法難を再評価すべく、歴史の中に入れていくことによって、そういう評価にかわっていったのではないかと思えます」と結論する。

石附氏(開成高等学校教諭)は佐前の宗祖が理想とした教団組織を考える際に留意すべきことに、①思想の根底にある心性や倫理規範などを宗祖遺文の行間から読み取る②叡山復興の理念を掲げる宗祖のアイデンティティーの確認の二点をあげ、文永五年の『実相寺衆徒愁状』日興写本(興全九三頁)を格好の文献として考察する。『実相寺衆徒愁状』の「原本制作に日興を介した日蓮の関与があったのではないだろうか」(興風十八号一七六頁)という菅原の指摘に賛意を示しつつも、さらに一步踏み込んで、「日蓮が日興や実相寺住僧から入手した情報をもとに述作した」と考えるのが妥当であるという。

山上の「身延會存御書『十住毘婆娑論尋出御書』『武蔵公御房御消息』について」は、この二書が日境編集の『録外御書』に収録されていることを明かした『興風』二十六号の池田論文「身延文庫蔵『録外御書』に関する考察」を受けて考察を加える。初めに『十住毘婆娑論尋出御書』(武蔵公御房返状も付随している)の日境模写を翻刻し、『縮刷遺文』『定遺』との同異を示す。そして十月十四日付『十住毘婆娑論尋出御書』を文応元年(一二六〇)の執筆とし、その返状である十月十一日付『武蔵公御房返状』の日付を廿一日の誤写と推定する。次に七月十七日付『武蔵公御房御消息』の日境模写を翻刻して、同じく文応元年の執筆と推測する。

大黒は『観心本尊抄』の「事行の南無妙法蓮華經の五字並び

に本門の本尊」の南無妙法蓮華經の五字〓曼荼羅、本門の本尊〓釈迦仏像と考えた上で、釈迦仏像を順縁、曼荼羅を逆縁の本尊と規定して身延期の教学推移を大観する。

坂井は日興の出生地と俗姓を考察する。①出生地は^{かしきざわ}鰺沢とされてきたが、日興の『弟子分帳』や日時『御伝土代』にその記述がなく検討の余地がある。身延久遠寺末の鰺沢蓮華寺寺記に「往事光長寺ト号ス。地頭大井橋六ノ宅跡ナリ」とあり、この②光長寺〓蓮華寺〓大井橋六宅跡説が鰺沢出生説の始まりで、久遠寺側が蓮華寺の寺格を上げるために同説を創唱したのである。蓮華寺と改名したのは久遠寺二十二世日遠で、慶長十六年(一六一一)の日遠筆曼荼羅に「恵命山蓮華寺」とある。寺伝の③説を日潮が『本化別頭仏祖統紀』(二七三二年)に取り入れ、しかも日興の父大井橋六を「大井庄司」として、④大井橋六〓大井庄司入道のまちがい^{まちがひ}を犯した。古来日興門流に鰺沢出生説はなく、確認できた資料中、その初見は大石寺四十八世日量の『富士大石寺明細誌』(一二二四年)で、要法寺系でも鰺沢説を取り入れる。『鰺沢町史』(一九五九年)以降、現代に至るまで、⑤鰺沢説と⑥大井橋六〓大井庄司入道説を踏襲する。現在出生地を確定できる資料は発見できていない。②俗姓は源氏、紀氏、由比氏、大井氏、橘氏の諸説があり、近世では橘氏説が通説化していた。ただ根拠が明確でなかったが、坂井は早川達道が『弟子分帳』の「遠江国前住甲斐国大井橋六三男橘三郎光房者日興舎弟也」の文の「橘六」「橘三郎」は橘の俗姓を通称にあてているとしたのを慧眼^{けいがん}として、橘氏と結論する。付録の資料「日興の生地と俗姓に関する諸説」は一〇八の記事を年代順に記す。

池田は①京都本圀寺蔵の『善無畏抄』写本について検討し、

②紙背文書の翻刻・解説、③弘安期の身延山の状況を考察する。

①では当該写本を他の日興写本の文字と照合して日興筆を立証する。古来、京都日蓮門下では当該写本を宗祖真蹟と見誤ってきたが、図版に示したとおり一見して日興筆である。②では当該写本の裏に書かれている書状十通の内、閏十月十四日付の日

弁書状の弘安元年が確定するので、他の九通も弘安元年か二年だろうとし、書状中のたか光、九朗二郎、四郎の人物比定を試みる。③では多くの檀越が身延登詣を願う中、それを仲介して宗祖へ取り次ぐ役割を日興が担っていたのだろうとする。

岡村氏(源立寺檀徒)は池田が考察した本圀寺蔵日興本『善無畏抄』紙背文書の読み取り作業(コンピュータ画像処理)の手順を報告する。

菅原は宗祖の戒壇論が熱原法難を境に、賢王による国家規模の本門寺(戒壇堂内蔵)建立の期待から、三秘相即の曼荼羅本尊を信仰のよりどころとして社会の浄土化を目指すことに比重が傾いたとし、中世的遺産の国立戒壇の呪縛から抜け出る必要があるとする。日順・日寛等の戒壇論も論ずる。

渡邊は『不受不施諸師書状等』一卷を紹介する。日猷が寛文十三年(一六七三)に日興・日愷・日詔・日樹・日賢の十四の切紙と書状を卷子本に貼り付けて散逸を防止したもので、当時の日蓮

門下の動向を知見できる貴重な史料である。今回初めて、日猷

識語を含めたすべてを影印で示して翻刻を行い解題を付した。

合わせて、寛文年間の成立と考えられる未公開史料「掛物一軸(日興書状・日流言上)」を影印で紹介し翻刻を行う。渡邊はこ

れらは「危機的状況の中にあつて不受不施義を頑なに貫いた先哲の精神を伝えるために成立したもの」と結ぶ。



本圀寺蔵日興本『善無畏抄』の冒頭部分

『興風叢書』〔19〕

『興風叢書』〔19〕は平成二十七年十

二月十三日刊で、身延久遠寺身延文庫蔵

の日海撰『三種教相見聞』十冊(写本)を

翻刻して頭注を施し解題を記す。担当は

大黒喜道。日海(一三三六〜一三八九)は

上総藻原寺四世の学僧で、他に『初心行

者位見聞』『頭底抄』等の著作がある。

第一冊の内題と奥書から、応安二年(一三

六九)三十四歳の時に談義を始め、康暦二

年(一三三〇)に一回目の校正を行ったこ

とがわかる。第一冊から第四冊に根性融

不融相、第五冊から第七冊に化道始終不

始終相、第八冊から第十冊に師弟遠近不遠近相を談ずる。日海

の教学は中古天台教学の影響が強いが、その後の本迹一致派教学

の中軸を担っていくため、本書の出版は画期的である。

(与えられた執筆期間を終えましたので今回をもって擱筆します。お読みくださり誠にありがとうございました。合掌)

【山行記】

近場の山行記

大阪地区 森 秀之

私は、今年の夏に北アルプスの裏銀座コースの縦走することを目標にしています。

その練習の一貫で、縦走シュミレーションに依じて、まずは六甲山縦走のナイトハイクを二月二十六・二十七日に。後は、昼間の山行として三月十五日、摩耶山。三月十六日、葛城山。三月二十八日に槇尾山。三月二十九日に八経ヶ岳と、一ヶ月に仕事の休みの合間を、山行に費やしました。今月以降も、また時間を作っては足慣らしをしたいと思っています。

ようどその日から連休だったので、月参りをしてから歩くように計画をしました。墓参後、時間を潰して、深夜、塩屋駅から六甲山縦走路ナイトハイクを決行しました。ヘッドランプをして、スマホでルートナビと標識を確認しながらスタートをしました。

その日は、気温も〇度近くで冷え込んでいましたが、幸い風がなく、歩いていくと寒さについては思ったより体感はなく、自分としては歩きやすい感じる状況でした。

暗闇というほどでもなく、天気もよく空気も澄んでいて、最初のピークの旗振山からは、明石海峡大橋もよく見えました。

その後も順調に、高倉台の市街地から槇尾山へと足を進めて行き、須磨アルプスという少し難所を、ヘッドランプを足下に照らして、慎重に確認しながら一歩と通過すると、安心したのかもしれないが、急に眠気が出てきました。

妙法寺付近の市街地のコンビニで、カップラーメンで食して休憩するも、さすがに深夜となると立ち止まると寒さは半端ないので、その後は仮眠をとる場所を探しての山行となりました。

高取山を少し下ると、参道に茶店があるので、良い場所を見つけ、軒先にマットを引いて寝袋に包まって二時間ほど仮眠させてもらいました。

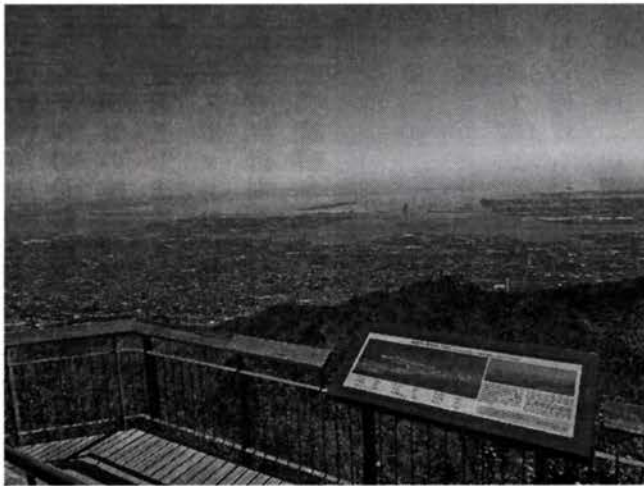
しばらくすると足音がするので、時間を見ると三時三十分で、見るとヘッドランプをつけて高取山へ登る人のようので、「日課なのかな」と思いながら、寒さで目が冴えてしまったので、仕方なく歩き出すことにしました。

少し歩くと高取山の奥の院があり、絶

景ポイントとの標識があり、気になったので階段を登ってみると、そこには素晴らしい夜景が広がっていました。さらにはまだまだ暗い道を歩いて鶴越駅の市街地から菊水山へと登っていくと、空がだんだんオレンジ色に明るくなってきて、日課にしているのか思わせる五・六人の人が、山頂まで散歩して日の出を待っていました。ちょうどタイミングよく、私も展望台から日の出が見られたので、大変



菊水山展望台からの日の出



摩耶山展望台からの神戸の町

ラッキーな気分でした。

そこで朝食をとって下ってから、鍋蓋山への急な登りを終えて、大龍寺への下り、市ヶ原から布引の滝経由で新神戸と歩を進め、そして三ノ宮駅から自宅へと帰路につきました。

久しぶりの山歩きでもあり、深夜一人で誰にも会うことのない、孤独を楽しむいい山行でした。

三月十五日には、前回六甲山縦走コー

スに続き、新神戸駅から布引の滝、市ヶ原を経由して摩耶山への山行でしたが、途中に稲妻坂という急登を超えた後に、学校林道の案内板があるを見た時は、「まだ半分か……」と思いながら歩きました。

後半に、天狗道の岩場を過ぎて、摩耶山頂付近の天狗岩を見て、掬星台に到着。平日でもあり、登山客もまばらで春霞の神戸湾の眺望を見ながら昼食をとりました。その後、アゴニー坂を降りきった所の袖谷峠に到着し、そのトイレの裏側から長峰山への登りと下りが続き、再び登り返して長峰山の山頂に到着しました。その山頂は、どういうわけか天狗塚と称しているのですが、眺望が楽しめて爽やか気分になりました。

少し休憩し、一気に阪急六甲駅に向かって下山ですが、途中から市街地のアスファルトの急な下り坂が意外と足にきつかった、というのが今回の感想でした。

次の日は、天気も良く、久しぶりに葛城山へ午前十時頃から出発しました。

水越峠の駐車場から天狗道ルートで葛城山頂に向かいました。勝手知ったる道ですが、登山を開始した時は、前日も歩いているので、身体が重い感じの足取りでしたが、急登で一汗かいてからは、身体エンジンも掛かってきた様で、黙々と一足、一足をほぼゾーンに入ったような歩きで進め、気がついたら、もう山頂直下のキャンプ場に到着していました。

山頂に行くと、誰もいない貸し切りの状態で、その日も春霞でしたが、六甲山系から大阪湾、大峰山系から生駒山系と、三六〇度の眺望を楽しめました。

葛城山ロッジ名物のかも井を昼食でいただき、ツツジ園を横目に（五月中旬頃満開）ダイヤモンドトレールコースの急坂を下って水越峠に下山し、帰りに風の湯（スーパージョ）に浸り、自宅に戻りました。

三月二十八日は、家から三十分ほど車を走らせれば着く、槇尾山という山を少し歩こうと思いい立って、昼前に出発しました。

ここは、屯鶴峰を起点に、ダイヤモンドトレールの最終地点で、山腹に行基・空海ゆかりの施福寺という古刹があります。西国三十三番札所の四番目の札所で、パワースポットの評判もあることから、平日でも参詣する人が結構いるようです。私は、満願寺というお寺の裏から登る満願寺ルートで、まずは六四七メートルの奥槇尾山へと向かいました。

途中でルートコースをそれるので、その目印を確認するためにキョロキョロしながら何度も立ち止まって確認し、目印を見つけて山頂を目指しましたが、山頂は眺望の視界がはななく、山頂の標識があるだけでした。

再度ルートに戻り、今度は槇尾山山頂と大阪湾が一望できる、絶景ビューポイントの蔵岩へ向かいました。

蔵岩は、施福寺の寺域ということで、現任職が立ち入り禁止にしているようなのですが、私が何度か行った時には、立ち入り禁止の標識が有ったり無かったりしていたので、どうということかと思っ



槇尾山はちょうど桜が満開

ていたのですが、たまたま蔵岩で休憩していた時に出会った別の山行者から、現任職の勝手な判断というか、地元の人等と意見が合わず、住職が立ち入り禁止を看板を立てると、地元の人が外すということが起こっているとのことでした。それを聞いて、いろいろあるもんだなと思いつつ、そういうことかと納得できました。このコースは、私には三時間程度で回れるいい練習コースです。



筆者（八経ヶ岳にて）

次の日は、大峯山系の、関西一高い八経ヶ岳登山に挑戦してきました。

朝四時に家を出発して、登山口である熊渡へ六時前に到着しました。

ほぼ同時に一台車が横に止まり、登山準備もほぼ一緒に、挨拶を交わして山行の予定等の会話したところ、同じルートで登ることでした。その二人連れの方は、先に出発していききました。

気温二度で肌寒いので、上着を脱ぐか着て行くかかで迷いましたが、結局脱いで登ることにして出発しました。

金引橋を渡り林道を歩き初めて、十分もしないうちに暑くなってきましたので、

脱いで登ったのが正解だと思いながら、白川八丁分岐を過ぎ、ひたすら登山取り付けを目指しました。

取り付け場所まで、先行していた二人に追いつきました。私としては、以前登った時に、二回ほど道に迷ったことがありましたが、そのまま先行してくれて、自分からは後から付かず離れずで着いていった方が楽と考えていたのですが、早速撃沈された思いになりました。

私が先行となってゆつくりと登り始め、カナビキ尾根の九十九折り坂、ナメリ坂という急登を、ピンクリボンとスマホのナビを頼りに慎重に歩いていきました。

振り返ると、二人組は何処にも見えなくなっていました。やっと分岐点に到着して少し休憩、その後日裏山、高崎横手の分岐点から、明星ヶ岳の山頂に到着しました。

途中、雪渓等がありました。チェーンスパイクも使わず歩きました。そこからは、まだまだ雪が残って凍結もしていましたが、慎

重に足下を確認しつつも登山靴で歩けました。

誰一人会うこともなく八経ヶ岳、弥山小屋と足を進めました。天気も快晴で、山頂からは最高のロケーションも楽しめました。

弥山小屋で休憩していたら、朝お会いした二人組と遭遇し、いろいろお話しして情報交換をしました。そこで二人とは別れ、私は弥山から狼平・高崎横手の分岐、カナビキ尾根へのナメリ坂の急坂の下り、カナビキ尾根の九十九折りの下り、取り付け場所、林道と進み、無事に駐車場へたどり着きました。

ほとんど登らないルートでしたが、今回は道に迷うことも一回もなく、ただただ八時間程度、山歩きに専念できたことと、大峯山系の自然に触れることができ、たのび、言葉では表現できない、貴重な一日となりました。

今年は、これからも夏の裏銀座縦走ができるように、時間を作っては登山の練習をしていきたいと思っています。

恵日だより



法華講入講式

境内の桜は満開で、春爛漫のこの日、早朝より勤行会の後、午前十一時半より源立寺本堂に於て、令和五年度の法華講入講式が行われました。

法華講入講式

四月二日(日) 午前十一時半

ご住職の導師によって読経唱題の後、西副講頭の司会で入講式は始まりました。まず寺川副講頭が、歓迎の辞を述べられ、次いで、司会より紹介された新入講者に、森秀之講頭より講員証が授与されました。これを受けて新入講者を代表して、松本徹さんより挨拶があり

ました。



法華講入講式後に、記念撮影

次いで、森講頭が登壇し、源立寺法華講の歴史と活動内容についての紹介があり、日蓮大聖人様の仏法を正しく理解・実践していくために、住職の指導の下、ともども大聖人様の仏法を学んでいきましよう、と呼びかけられた後、法華講の事務関係についての説明と、地区役員さんの紹介がありました。

その後、ご住職より指導（別掲）があり、最後に、題目三唱をした後、記念撮影をして、入講式は無事終了しました。

◆新入講者紹介

- ・槻木地区 谷澤武様（池田市）
- ・北摂地区 松本徹様（吹田市）

以上、二世帯の方が、この度源立寺法華講員として信心修行をされます。よろしく願います。

【訃報】

【槻木地区】川西市

覚遠院法弘信士 四月三日寂

俗名山田昌弘之霊 行年六十一歳

【槻木地区】池田市

保徳院信道信士 四月十一日寂

俗名杉本保夫之霊 行年八十一歳

この度、右の方々がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

【皐月詠草】

洗車終え 乾拭きたる ボンネット

栗虫の糞 バラバラと落つ

小遣いで おだてながらに 茶摘み終え

後悔しつつ 紙幣渡しぬ

〔和風〕

わが記憶 失せぬうちにと 来し方を

書きとじむべく 机に向かふ

病める子が 心の扉 とぎす前に

こころうるほす 慈雨欲しかりし

〔故奥はつ〕

【恵日俳壇】

茶摘みすや一芯二葉のやはらかし

雨合羽はや用なさず田を植うる

〔農婦〕

ホホケキョ心に響きし登山道

頂から遠くに霞む釈迦ヶ岳

〔森 秀之〕

ひと休み望む山頂春霞



【法華講入講式住職挨拶】

受くるはやすく持つはかたし

法華講入講式、大変おめでとうござい

ます。

「立正安国論」の中に、

「国土乱れん時は先づ鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る」

(全集一九頁)

と書かれています。

なるほど、今の時代を見ると、いろいろなどころで不正・不義が行われて、だんだん社会の感覚がおかしくなっているのではないかと思えます。

例えば、オリンピックの組織委員会が、それこそ上から下まで賄賂漬けになった



新入講者に向けて挨拶をされるご住職

り、あるいは安倍首相のいろいろな悪事が出てきたりとか、それこそ上から下まで、一般の庶民中でも連続強盗殺人事件が起こったりとか、世の中あまりにもお

かしなこと、邪義が横行してしまっているようです。我われにも、世の中どうせごまかしながらやっているんだ、という感覚があるような気がするのです。

そういうふうな状況の中で、今度のWBCで大谷選手が活躍して、そういうことが非常に話題になるということは、逆に言えば、そういうことが今の時代に非常に少ない、普通でないということになってしまったのです。

普通であれば、いろいろな思いやりの心とか、あるいは礼儀を知っていることとか、あるいは自分の果たすべき役割を一所懸命頑張っているとか、そういうごく当たり前のことが、当たり前でなくなってきたところに、一つの問題があるのだと思います。

そういった意味で、日蓮正宗の信仰においても、長い間、この四・五十年の間のことを考えたら、あまりにも間違いだらけのおかしなことが続いて、我われまでそれに巻き込まれて、だんだん正邪の分別がつかなくなってきた部分があるのではないかと思うのです。

そういう中で、たとえ数は少なくとも、

大聖人の信仰を、日興門流の信仰を受け
継いで、世に示していくことが、我われ
の大きな使命ではなかったかなと思うの
です。

の使命を果たしていただけたら幸
いだと思います。
何といつても、
「受くるはやすく持つはかたし」(全
集一一三六頁)

これから永い付き合いになります、
本日をまた一つの契機にして、信心を伝
えていくとともに、信心を強くして、そ

で、どこまでも持続して、どんなことが
あつても諦めないで、正しい法を続けて

第五十一回源立寺法華講総会のご案内

法華講の皆様にはご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、左記の通り第五十一回源立寺法華講総会が開催されます。

また、総会後に、第十一回源立寺新菩提寺建立護持会の報告があります。

講中の皆さまには万障お繰り合わせの上、御参詣・ご出席下さるようご案内いたします。

記

日時 五月十四日(日) 午後一時〜三時三十分

会場 源立寺本堂

講演 秋田県美郷町 妙行院 渡辺道也尊師

いくということ、我われもモットーと
したいと思います。

また、いろいろな御書の中で、大聖人
が各地の信徒に、御消息をつかわされて
いますが、その中に、

「互ひに師弟と為らんか。」(全集一
二二四頁)

と申されています。

誠にありがたいお言葉ですが、ともに
お互いが師となり弟子となつて、ともに
励まし合つて信心をしていくことが、我
われの基本的なあり方だと思えます。

どうかそのつもりで、講中の方々と話
し合つて、道を間違えないように頑張っ
ていきたいと思えますので、どうかよろ
しくお願いいたします。

最後に、入講式に当たつて、大聖人の
御書の一節を贈りたいと思えます。

「命限り有り惜しむべからず。遂に願
ふべきは仏国なり云云。」(全集九五
五頁)

五月の行事

- 一日(月) 午後二時 お経日
- 七日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 十三日(土) 午後一時 お講
- 十四日(日) 午後一時 第51回法華講総会

※六月号の継命・恵日発送(5月末)は、
「豊能」地区が担当です。
七月号の継命・恵日発送(6月末)は、
「兵庫」地区が担当です。

◆マスクの着用について

三月十三日(月)より、義務化されていたマスク着用が、個人の判断に任せられることになりました。

それに伴いまして、源立寺においての各種法要・行事への参加の際のマスク着用につきましても、講員各位の判断にお任せすることといたします。

講員各位におかれましては、よろしくお願
いいたします。
源立寺

恵日

令和五年五月号 通巻三四〇号
令和五年五月一日発行

編集兼
発行人
発行

菅野憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

〒(〇七二)七五一-三三三五

E-Mail kanno@ombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

〒振替 加入者名 恵日編集室会計

口座番号 0138012112649